
イーストオアシス

吉野華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イーストオアシス

【Zコード】

Z3389F

【作者名】

吉野華

【あらすじ】

辺鄙な砂漠の町に暮らすフォレストは、将来のことで現実逃避をしたい人並みの高校生。親友に恋する勝ち気な従姉に囮らずも振りまわされる、そんな夏休み。

第1話 砂嵐の午後

朝から照りつける太陽。砂礫混じりの熱風。荒涼の砂漠の中の我が町イーストオアシス。サボテン。砂漠の海と点在するサボテン。近所の市民プール。それから、寄せては返す波のごとく繰り返す単調な日々の繰り返し。

この長い休暇が終われば、気難しい親父の小言をのらりくらりとかわしてきた俺も、さすがに進路の問題を考えなくてはならなかつた。俺は暇つぶしに、現実逃避のために、何か風変わりな出来事を探していた。

面白ければ何でもいいんだよ。夏の乾燥した青空を漂う飛行船を見上げて、俺は思った。

将来は冒険者になるのもいい。宇宙船の乗組員。それとも、縦横無尽に戦場を駆ける軍人なんていうのはどうだ？ バスター・ドソードで敵を切り裂くんだよと俺が言つと、友人のハンニバルは肩を聳やかしてこう答える。

「今どきの戦場は化学兵器だ。剣なんてファンタジーの世界じゃ英雄になれても、現実じゃ只の馬鹿だよ。映画でもあつただろつ。一発で射殺されちゃうまい」

夏のうだるような暑さの中、大して深く考えていたわけではなかつたんだと俺は言い訳をした。同い年のくせに、ハンニバルは冷めている。彼がこんなふうにいつもすかしているわけじゃなく、馬鹿げた騒乱を楽しむ気のいい奴だつてことは分かつていて。

でも彼が一度も心からは笑つたことがないつてことを、俺はずつと前から知つていた。

「それよりフォレスト、大学は？」

並んで道を歩きながらハンニバルは言った。砂漠の果てのこの辺境の町にだって、昨今は最低限の行政は行き届いているものだ。しかし俺たちが歩く文明によって完璧に管理舗装されているはずの道路は、いつだって砂に侵食されて、半分は過去の遺物のように砂漠に埋もれかけていた。

「別に、何も考えてない」

俺は答えた。

「進学しないつもりか？」

ハンニバルはなおも俺に迫る。彼のように成績に何の問題もない優等生ではない俺は、近頃では夕食の度に大学進学を迫る父親や出来のいい年子の兄貴の存在を思い出して、ついイラッとした。

「進学したら何かいいことがあるのか？」

「それは……、学生を続けられる」

俺の切り返しから不機嫌さを感じ取ったのか、ハンニバルは幾らか声のトーンを落とした。そもそも、進学なんて、高校生がすんなりその有用性を回答できるほどには大義のことじじゃないんだ。

「だね。それから？」

俺は腕組みをしてハンニバルを見上げた。昼前に起きてから深夜にラジオを消してベッドに潜り込むその瞬間まで、現実に属するすべての問題に係わりを持ちたくない俺は、断固その姿勢を譲らなかつた。

するとハンニバルは少々真面目な顔をして、訥々と語り始めた。

教師たちがヒステリーを起こすほどではないにしても、学内の成績優秀者でありながら校則違反の常連でもあるハンニバルだったが、どんなに悪ふつてみせてても彼の根が真面目だつていうことは日常の彼の話しぶりからして嫌というほど伝わってくる。そんなふうに髪なんか伸ばすのやめて、もっとお堅くしていなよ、なんて嫌味が喉からでかかっても言わるのは、彼が俺の幼友達だからなのだ。

「つまり、卒業したら学士になれる。やっぱり大学を出ているのと出でていないのとじや、世間の目も違うだろう。有名校ならなおさらだ。この町の学者の間にも、学闘があるほどだよ。

それに、大学を出れば給料が高いんじやないか。この町には戻らないで、都市のほうに出て行くにしても、やっぱり有利になるものだと思つ」

「都会はなべ底景氣だつて親父が言つてたぞ」

「ああ、なるほど。フォレストの家は家計が苦しいのか……」

「なんでそうなるんだよ」

抗議のために再び彼に目を向けると、ハンニバルの肩の辺りまで伸びた茶髪が、砂混じりの温風によつて女の髪のように靡いていた。勿論、別にそれに見惚れたわけじゃない。確かにハンニバルは、同性から見てもなかなかイケメンであるとは思う。それもひ弱な優男なんかではなく、彼の野性味の強い顔つきが羨ましいと思わないではないが、しかし俺は自分のこのいかにも人のよさそうな青い目のほうが気に入つてゐる。

俺が注目したのは、珍しく露わになつた彼の横顔にだつた。いや、そうと言うよりは、そこに宿つてこいつという存在を彩つてゐるそこはかとない不幸せに、と言つたほうがより正確だつたろうか。ハンニバルは代々この土地の名士である裕福な家庭の長男で、子供の頃から何不自由のない恵まれた環境で育つてゐることを俺は知つ

ていた。

その上大柄で背が高く、俺と同じ帰宅部である以上大して運動もやつていなかだるうに、フットボール部のスター選手のような羨望すべき体格をしていた。これだけの外見の上に成績優秀であるということは、つまりはクラスでは最も影響力を持つ人間のうちの一人ということで、必然的にスクールカーストの上位者ということになる。大して愛想もよくないつていうのに昔から女どもには無条件に人気があつた。

けちのつけようのない理想的な人生。

それなのに何故、思わず払い除けたくなるような陰鬱がこいつにつきまとつていてるのだろう？

それは昼食を取るためになじみのハンバーガーショップへ向かう道すがら、何てことのない瞬間の出来事だつた。気がつくと既に俺たちの話題は変わつていて、俺はバイクが欲しいのに親父が金を出してくれないことをハンニバルに愚痴り、ハンニバルは昨年亡くなつた彼のお祖父さんから高級車をプレゼントされたことを卑屈な様子もなく俺に話していた。

卑屈さのないイケメンほど始末に負えないものはないと俺は思ったが、それはまた別の話だ。

「B&R」ハンバーガーショップのオヤジであるバンクさんが、相変わらず頼みもしないのにピクルスをたっぷりと挟み込んでくれている頃、俺たちはクラスの女子数名と遭遇しているところだった。女子のリーダー格である金髪のマルガリータは、チアリー・ディングとダンスを好み、明るくて活発な美人だったが、難点をつけるとすれば女にしておくのが惜しいくらい鼻つ柱の強い性格だったことだ。彼女はティム伯父さんの一番目の娘で、うちの近所さんで、他でもない従兄弟の俺が言うんだから間違いない。

「涼を取りにね」

蒸し暑い安ハンバーガー店で、気取ったふうに彼女は言った。何しろ彼女の意中の相手であるハンニバルの前だから、このときの彼女の態度は分かりやすいほど彼に媚びたものだった。

まさか彼女の過剰なほどの化粧や色気のせいではないだろうが、俺は暑くてたまらなかつたし、その場にいる女どもにはまるで興味がなかつたから、そそくさと立ち去ろうとする俺の腕をハンニバルががつちり押さえていた。彼が女子に囲まれていることに困つて、無言で助けを求めていることが俺には分かつていたが、いつたいどうしろつて言つんだ？ 俺は恨めしくハンニバルに視線をやつた。

「ねえ、ハンニバル君、あたしたちと一緒にランチをしましようよ。せつからこうして出会えたんだもの。これも何かの縁だと思うの」

砂漠の中の狭い町だ。ハイスクールは一校しかなく、その周辺が俺たちの活動範囲のすべてだとしたら、町の何処かで顔見知りに出くわすことくらい偶然でも何でもないのだが、それを指摘しようとい

う気にはならなかつた。マルガリータをからかうと後が面倒だとうこともあつたが、とにかくこのときは店の中が蒸し暑かつたからだ。バンクさん曰く冷房が壊れてしまつたんだということだつたが、この店で冷房が壊れることは毎朝砂漠に太陽が昇ることよりも既定事項だろう。俺たちがそれでもこの店に通う理由、安いのに美味しいハンバーガーと、冷たいジュースを取りに行きたかつた。

「ハンニバル君は照れているんだわ」

マルガリータの手下の女子たちは、ハンニバルの反応が芳しくないことをそう言つてフォローしていた。

マルガリータは確かに魅力的でないわけではなくて、大学生の恋人がいるつていう噂が耐えないとくらいには皆の憧れの的だつた。

俺たちが想像の上でしか知りえない数々の男女の秘密と言うやつを、もうすっかり知つてしまつていう意味では、俺としても羨望の眼差しを向けないでもない。彼女のピンク色の唇や、形のいい胸元が、何人の男を知つているのかなんてことが、その当時の俺にとっては結構な関心事だつたりするわけだ。

「ねえ、フォレスト。あんただつて、あたしたちとランチしたいんでしょ？」

ハンニバルがいつまでも自分の意向を表明しないために、と言うか、遠まわしには何度も断つてているのにマルガリータたちがいつまでも食い下がつてているために埒が明かないのが現状なんだが、とうとうマルガリータの不満の矛先が俺に向いた。

俺は少し瘦せ気味ではあるにしても小男というわけではなく、少なくとも目の前にいる女子の誰よりも背丈はあつたのだが、ハンニバルと比較するとどうしても侮りやすく見えてしまうのだろう。他の女子たちも俺に対しては容赦のない視線を向けてくる。

まるで、俺がハンニバルの「バンザメ」であるかのよつた扱いに、俺はさつきから既に充分腹を立てていた。

「嫌なこいつた。なんでおまえらと昼飯を食わなきゃならぬんだよ。とびきりの美少女つていうならともかく、おまえらじや楽しくも何ともないから嫌だ」

するとマルガリータは俺を馬鹿にしたような顔で、軽蔑的なことを俺に言つた。

「あら、フォレストのくせに言つじゃない。こいつだつて、あんたみたいなガキとなんてお断りよ。ハンニバル君がいなかつたら、誰にも声もかけられやしないし、氣にもとめられない存在のくせに、相変わらず態度だけは一人前ね。

でもこの機会を逃したら、あんたみたいなのは一生女の子と食事もできなうてことを理解するといいわ。ついでにでも誘われていつてことを有難いと思はなさいよ」

「けつ。おまえらみたいな逞しい奴らが、女の子なんてうちにカウントされるとも思つてゐるのかよ。チアリーダーつてだけで威張り散らしてゐる「リラのくせ」によ」

「何ですつて！？」

「おいまさかマルガリータ、おまえは自分が可愛い女だなんて勘違いしているんじゃないんだろうな？ その胸元を強調すれば、誰もがおまえにチヤホヤするのが当たり前だとでも思つてゐるのか？ だつたら教えてやるが、ハンニバルは日頃おまえらに脅かされて萎縮しているような、おとなしい女が好みなんだよ。だからおまえが誘つても無駄なんだ」

「フォレスト……いいわ、よく分かつた。覚えてなさい。でもこれだけは確定のことよ。あんたはどうしようもないガキで、それに、救いようのないバカだつてこと！」

子供の頃、女兒の成長の早さとマルガリータの抜群の運動神経のために俺はいつも同じ年の彼女に喧嘩で敵わず、最後には追いかけまわされ、泣かされる子供だった。

しかしどうしたことかそのときは予想していた反撃もなく、マルガリータはしおらしい態度であつさりと引き下がつた。

彼女とその取り巻きが口々に俺を罵りながら店を立ち去つた後、俺はハンニバルの脇腹を小突いた。彼は、普段自らがそのように振る舞おうと努力しているその軽薄そうな外見通りに演じることくらいわけない性格のくせに、なんで今は鬱陶しいマルガリータたちを威嚇して追い払わなかつたのか分からなかつた。

彼に好意を寄せていることが丸分かりなマルガリータや、女子たちの前で、少しあい格好をしたかつたからなのか？

「俺に汚れ役をやらせやがつて。貸したからな」

「俺が呟くと、ハンニバルは心許ない様子で何度も頷いた。

「何だよ、おまえ実はマルガリータのこと気になつてたのか？
それとも、気になるのは手下の女の誰かだつた？」

俺はそう言ひながら、何だかぼうつとしているハンニバルの視線の先を辿つた。そこはカウンターの向こうの油にまみれた調理場で、バンクさんの姿が見えていたが、そのとき彼はその白い帽子を取り落としていて、しかし問題だつたのは本来であれば決して落ちるはずのないもの　　、彼の茶色の頭髪までが一緒に床に落ちているということだった。

そのためにそのカウンター付近では客たちが騒然としていて、ハンニバルはさつきから泣きそうに取り乱すバンクさんと、それを取り巻く何とも救い難いそれらの状況を見ていたのだ。勿論、俺は遠慮

なく腹を抱えて笑つた。たとえ執拗にピクルスをサービスしてくれることにしてもバンクさんに対して悪い気持ちを抱いたことはないが、それは平穏な日常の中で目にするものとしては予測不能で、しかも非常にインパクトのあるアクシデントの類だった。樂しまないでどうするというのだ。

そしてそのとき昼食のためにたまたま店を訪れていた客の八割がたは、その非現実的な光景に対し、同じような反応を示していたと思う。好意的な爆笑、人生に彩を添えてくれたバンクさんに対する畏敬、或いはこれまで彼がひた隠しにしていた頭髪に係る重大な秘密に対する驚愕、少しは眉を顰める人間もいた。

そしてそのとき俺はその状況下で少しも笑つていらないハンニバルの人格に対してさすがに尊敬の思いを抱きかけたが、実は彼はそんな馬鹿げたアクシデントが目に入らないほど別のものに見入っていたのだった。

彼が何をみつめていたか、俺がその正体を知ったのはそれから少し後のことだ。

第3話 キャラクター・シャツの女

「よくここを利用するのか?」

一連の馬鹿げた騒ぎを乗り越えて、注文したハンバーガーができるがつてくるのをもうしばらく待つ間、珍しいことに、ハンニバルのほうから女に声をかけていた。

彼女はすらりとした身体つきながらも豊満な胸と形のいい尻が魅力的で、あまり化粧つ氣はないながらもかなり可愛い感じの人だった。ハンニバルの四歳年上の姉さんとクラスメイトだったとかいう会話から推測した限りでは、二十一かそのくらいということなのだろうが、俺たちと同級生に見えないこともない。

いわゆるハンニバルのストライクゾーン、学生時代は教室の隅で地味に本を読んでいるようなタイプなのだが、連中と違うところは彼女が美人だつていうことだ。

着飾れば、この世の春を謳歌できるだろ(ひ)、どうしてキャラクターチャツによれよれのパンツ姿なのか、それでもなお清楚で可愛く見えるところが何とももつたいたい。

「ええ

女は頷き、ハンニバルに対して微笑んでいたが、あまり他意を期待できそうもない儀礼的な笑顔だった。ハンニバルが先刻から一生懸命働きかけたり、あからさまなほどの熱視線を彼女に向いていることは随分対照的だ。

と言つたが、ハンニバルがこういう顔や態度を取るなんて俺は初めて目の当たりにした。何と言つたか、こいつって実は情熱的な奴だったんだな。

彼とはガキの頃からの十年以上のつきあいになるが、女に対してこ

んな積極的なハンニバルは初めてだった。あんまり興味深いので、俺は何気なさを装つて二人のやり取りを凝視していた。

中でも面白かったのは、盛りのついた高校生に絡まれた困惑を隠せないながらも、間を持たせるための会話を提供する彼女の言葉に、あり得ないほど食いつきのよさを見せるハンニバルの態度だった。

「ここ」のトマトバー ガーが好きなの

「俺も好きなんだ」

「フィッシュ フライも」

「そう、フィッシュ フライもだ」

「安くて、美味しいものね。忙しくてお昼を買出しに行かなくちゃいけないときなんか、お昼代を浮かせるのにもうよっぽいのよ」

「買出しに来たのか？」

「ええ、そう。今は夏休みなので、弟たちのお昼を考えなくちゃいけないのが大変。兄と二人なら、焦がしたスポンジにシロップをかけたものでもいいんだけど」

「大変だね……」

「ええ」

「ああ、だつたら、俺がこここの支払いをじきそりするよ。

今日だけじゃなくて、これからずっと。そのことを店主に言つておくからさ」

ハンニバルは好意で言つたのだろうが、その申し出に彼女は少し困惑したようだつた。まあ確かに、高校生に今後の店の支払いを奢ると言われても普通は困るだらうな。

「いえ……、いいのよ。大丈夫」

彼女は答えた。

「遠慮しなくていいよ」

ハンニバルは、どうにか彼女に取り入りたくて必死の様子だった。

「ミカンさんの役に立ちたいんだ」

「ありがとう。でも気持ちだけで充分よ」

「どうして遠慮するんだ？ アマリアとあまり仲よくなかつたから？」

「そういうわけじゃないわ」

「だつたら奢りさせてくれよ」

「だって、貴方にそうして貰う理由がないわ」

「でもミカンさんの家は貧乏で、金に困っているんだが」

「……」

俺は彼の友人として、この失態を何とフォローすべきか思案しなければならなかつたが、その方法が思いつかないほど失態であることは言つまでもなかつただろう。

金持ちの坊ちゃんの無邪気な発言、そもそも湯水のように小遣いを貰えるハンニバルには昔から、金持ちであるがゆえの常識の欠落したこれらの発言がしばしば見受けられたのだが、しかしたとえそうしたことを勘案するにしても好きな女に対して選択すべき言葉じゃないことは明らかだった。ミカンさんとやらは固まつていた。そりややせうだらう。

「お金には困つてこゐるけど……」

しづしづして、まるで貧乏だから服が買えないということを喧伝しているかのようなよれよれのキャラクターTシャツを引っ張りながら、ミカンさんは本当に困り果てたよつた顔でそう答えた。

「でも……」

俺は同情を禁じ得なかつた。それがたかだか高校生に自尊心を踏み躡られたミカンさんに対しても、それとも最初から大して発展する可能性がなさそうだった恋が確実に駄目になりそうなハンニバルに対してかは分からぬが。

「大丈夫、お財布の中は足りていいから……」

ミカンさんは、ハンニバルの失言に声を荒げて怒り出すわけでもなく、さもなければ酷い侮辱に対して泣き出すわけでもなく、そう言ってフラフラと店を出て行つた。あれがマルガリータなら、暴れまくつて店内を幾らか破壊しかねないという現実を思うとき、俺は結婚するならああいう優しい女の人がいいなあなんて他人事のように思つた。実際他人事なんだけど。

「俺なんかまずいこと言つたかな！？」

その後、ハンニバルは縋るような顔で俺を見た。

「んー、まずいこと言つたつてことに無自覚なことが相当マズイ」

俺は答えた。

「ハンニバル君の片想いは終了の予感」

「なんでだよつ、理由を言え！」

「チーン。ハンニバル君がバカなせいで終了しました」

「フォレストツ、この野郎つ！」

そしてハンニバルは俺の胸倉を掴みかけたのだが、しかし、天はま

だ彼を見捨ててはいなかつたのだ。

間もなくコック帽を不自然なほど田深に厳重に被つたバンクさんが、持ち帰り用の紙袋を用意してカウンター前までやって来た。彼は少し辺りを見まわしてから、さつきまでミカンさんと立ち話していた俺たちにこう言った。

「あら？　ミカンちゃんは？」

第4話 親友の裏切り

バンクさんの手からトマトバー ガーの入った紙袋をもぎ取つて、支払うべき代金の十倍近い大きな紙幣をカウンターに叩きつけて、ハンニバルはミカンさんを追いかけた。こんな口実がなくたって、さつさと追いかけて謝ればいいと思うのだが、恋する男子といつものは、あれで何やら心中複雑なものらしい。

本日は晴天にして強風、午後からは軽めの砂嵐が吹き始めていて、徒歩での移動は困難な天候となりつつあつた。俺たちはバー ガーシヨップを飛び出して間もなく、手ぶらで帰途に着くミカンさんの後姿をすぐに視認することができた。

彼女は初見からしてあまりしつかりしたタイプには見えなかつたのだが、案の定、昼飯を買いに来て昼飯を忘れて帰るというかなり重症のドジ娘のようだつた。これがドブスなら痴呆症かとでも言つてやりたい氣がしないでもないが、可愛い娘には何となく度量が広くなつてしまつるのは、いつの時代も男の性というものなのである。

ハンニバルよりも短い茶色のボブヘアを押さえながら、ときどき風のせいに立ち止まるミカンさんの尻の形が、やつぱりなかなかいいと俺は思つた。

まあ、ハンニバルの背中を追いながらこんなことを考へているのは、ミカンさんの性格はどうやら随分優しい感じがしたので、忘れ物のハンバー ガーを届けてくれたつてことで、さつきのハンニバル君の失言も、笑つて許してくれるんじやないかなという気がしていたからだ。何しろ俺には姉がいないので、年上の女性に対する憧れみたいなものがこの判断には多分に介入していることは否定できないが、しかし俺の母親も結構そういうタイプで、どうしようもない親父の憎まれ口なんかを笑つてかわしたりしているので、大人の女つていうのは結構そういうもんなんじやないかと思うわけだ。

ほどなくして俺たちは先を行くミカンさんに追いついた。ハンニバル

ルは当惑の表情を浮かべる彼女にハンバーガーの詰まつた紙袋を押しつけた。もつと渡し方があるだろうと俺は思つたが、普段の取り澄ましたハンニバルとは違う、愚かで哀れなハンニバルを見られるといつのも、なかなかに楽しめた。

ハンバーガーの紙袋を受け取ると、ミカンさんはそこではじめて自分の失敗に気がついたのだろう。自分のこめかみをこつんと叩いた。

「ああ、わたしつたら、どうしてこうなのかしら」

それからハンニバルと、俺にも視線をくれた上で、につこり笑つてこう言つた。

「届けてくれてどうもありがとう。これを忘れて帰つたら、何のために外出したのか分からないとこりだつたわ」

「あの、さつき俺……」

自分の言つたゞの言葉がミカンさんを傷つけたのか、たぶんハンニバルは大して分かつちゃいないんだろうが、それは少なくとも反省しているようには見える態度だった。

「いいのよ、気にしないで」

ミカンさんはそう言つてうなだれるハンニバルを見上げ、ほとんど俺の予想した通りに優しくハンニバルを許した。

それで、この昼下がりの出来事は何事もなく収束を迎えるかに思われた。たぶんミカンさんはハンニバルのことを恋愛対象としては見ていないだろうし、これからもそうなることはないと思うが、二人の関係は意外と友情としては続くかもしね。それよりも俺は、これから「B & R」に引き返して、注文していたチーズバーガーとビッグベーコンバーガーとコーラとポーカナゲットを食べた後の午

後からの時間の過ごし方について頭の中であれこれ予定を立て始めていた。

この砂漠地域では強風の日に外で遊ぶ子供はほとんどおらず、夏休みともなると普段行くゲームセンターもショッピングセンターも暇を持て余したガキどものたまり場となる。家中や公園プール、学校や企業の体育館、各種図書館、地域の「ミニユースティーカ会館なんかが学校推奨のたまり場だが、そんなところに行くのは小学生かバ力だけだ。

ちょっと遊ぶつていうことを知っている奴なら、迷わず歓楽街のほうへ足を向ける。バーとか、カウンターつきのダンスフロアなんかに立ち入るには二十一歳以上の証明書が必要になるが、うらぶれたカードハウス辺りは穴場だ。柄の悪い店の連中は、まさか賭場に高校生が紛れ込んでいる可能性について考えてみることすらないだろう。しかも店内は大抵が暗がりだから、大学生だと言つて酒を頼むこともできるのだ。

しかしハンニバルが予想外の態度に出たことでの事態は一気に急転した。

ミカンさんの悲鳴のよくな声がして、俺は一瞬にして現実に引き戻された。

「イヤッ…」

俺が見たのは、何をしようとしたのか知らないが、ミカンさんが泣きそうな顔でハンニバルの手を払い除けるところだった。

「触らないで、そんなことをしようとしてないで…」

「どうしてだよ。前は嫌がらなかつたのに」

「それは貴方が泣いていたからよ。悲しくて、泣いていたから…それに子供だつたからだわ」

「違う、もう子供なんかじゃなかつたさ！」

年下だつてことは認めるけど子供じゃない……、それはミカンさんが誰よりもよく知つてゐるはず」

するとミカンさんは顔を真つ赤にして、それから何を思つたのか一度こそ俺たちの前から逃走するべく走り出した。

何やら軽いラブコメの予感がした俺は思わずによついてしまつたが、しかし、学内の陸上部員につけ狙われるほど運動神経もいいハンニバルは、あつさりミカンさんに追いついた。

彼はミカンさんを掴まると、彼女を強引にその腕の中に抱きすぐめた。ミカンさんは最初しばらくは抵抗を示していたが、しかしハンニバルのでかい身体に閉じ込められて身動きが取れないことを諦めたのか、やがて彼女の腕はだらんとし、それからハンニバルの背中に改めて彼女の白い腕が這わされた。つまり、彼女が自分からハンニバルを抱きしめたということだ。

それは傍目から見て、まるで愛し合ひの恋人同士であるかのような抱擁だった。

俺は、二人の身体のあの密着具合は、既に男女の深い間柄になるための行為を済ませた者同士でなかつたら成立し得ない抱擁であるような気がして、その意味で愕然としていた。

ハンニバルの奴……、自分だけ、食べ頃のあんな美人と……？

勿論真相は分からない。今夜にでもこれらの経緯について、ハンニバルを電話で問い合わせやらなければならぬことを決意する俺だつたが、しかし、もし俺が憧れの近所の美少女であるカレンちゃんとハグする機会があつたとしても、せいぜい彼女の肩に触れるのが精一杯だつていうことがこの疑惑の根拠として非常に強力に作用していた。何しろカレンちゃんの胸や下半身があんなふうに自分の身体に押しつけられたりしたら、俺だったら絶対正気なんか保つていられないだろうからだ。

それなのにそれを平然とやつてのけるあいつら……、つまりあいつらときたら十中八九、大人になるための階段を、のぼっちまつてい

だいじめ！

第5話 従姉のマルガリータ

夜になつても親友の思いがけない裏切りに、くわくわした気分を拭えないでいた。

確かにハンニバルは外見からして未経験だなんて信じられない風貌をしているが、奴に彼女がいたためしがないつてことは、子供の頃からつきあつている俺は誰よりもよく知つていて。隠し事をしようつたつて、できやしない距離感が俺たちの間にはあつたのだ。それなのに実際はあんな年上の恋人がいたなんて、俺だけがガキのままだなんて、これはあんまり酷い裏切りだつた。

その夜は週に一度、家族ぐるみで一緒に夕食を取るティム伯父さんの一家が家に来つていて、もうお互い子供たちはでかくなつたつていのにまだ昔みたいな馴れ合いを希望する両家の親たちの眼差しに辟易しながら俺は不機嫌に夕食を済ませた。

ティム伯父さんのところは、長女のセーラはもう町から遠く離れた大学に行つてしまつていて、来つてるのは次女のマルガリータ、後はガキの弟妹。うちは兄貴のフォードと俺、それから年離れた末の妹つていう兄弟構成で、俺は兄貴とはもとから仲がよくないしましてや女やガキどもと話すこともないので、相変わらず実につまらない食卓だつた。

早々に自分の部屋へ引きこもつて、ハンニバルに件の事情の詳細を聞き出そうと思うも、電源を切られていて繋がらない。

そこへマルガリータが勝手に俺の部屋へ入つて来たのだが、意思の疎通もそこそこに、マルガリータの飛び蹴りが華麗に俺のみぞおちに決まり、体勢を崩して倒れ込んだ俺は更に悪いことに後ろの壁面に頭を強打するはめになつた。

咳き込み、呼吸が上手くできずに喘ぐ俺を見下ろしながら、マルガリータは両手を腰に当てた格好でじうのたまたた。

「いい気味！ 人の恋路を邪魔するからよ。」

「ゲホゲホッ、この男女が……」

「違うわ。単にあなたが弱すぎなのよ」

「冗談じゃない、昔ならともかく、幾ら何でも今なら腕力で女に遅れを取るわけはなかつた。だが、男が女を本気で殴つたらシャレにならないつてことくらい心得ているんだ。俺はおまえに大いに手を抜いてやつているんだ」ということを訴えたい気分だつたが、そんなことをしたところで負け犬の遠吠えとか言われるのがおちだらうから黙つていた。

「そんなことより、ねえ、大事な相談があるの」

たつた今、俺に飛び蹴りをかましたことなどまるでなかつたかのような顔をして、マルガリータはそう切り出した。

「相談？」

どんなことかはだいたい見当がついていたが、分からぬふりをして俺は聞き返した。

「ハンニバル君のことよ。

あたしが彼を好きだつてことを、クラスの女子で知らない子はいないわ。夏休みが始まる前に、みんなに言いふらしちやつたんだもの。まさかあんたにまで話が伝わつているとは思わなかつたけど、このままじやあたし、学校が始まる頃にはみんなの笑い者になっちゃうわ

マルガリータが誰を好きかなんて、態度を見ていればバレバレなんだけど、交際の成立もしていない相手を好きだなんてことを自分か

ら誰かに話すなんて浅はかさは、我が従姉ながらなんという馬鹿さ加減かという気がした。

何か行動を取る前にあまり物事を深く考えないのは、マルガリータの長所でもあり欠点でもあった。あっけらかんとしているようでは、後からこいつやつて後悔したり悩んだりするのはいつものことなのだから、いい加減学習したらどうかという嫌味が脳裏に浮かんだが、彼女の思いの外深刻そうな表情が、それをからくも押しとどめさせた。

「ねえフォレスト、正直に言つて、彼つてあんまり脈なさそうな感じなのかな……、話しかけても嫌な顔をしないし、勉強教えてつて頼んだときも結構親切だったし、あたしだつたら彼とお似合いだって周りに焚きつけられて、つい調子に乗っちゃったのよ。

でも今日ね、ふと、もしかしたら彼には他に好きな人がいるんじゃないかって思ったの。

だってね、そうじやなかつたら、ううん彼女がいたとしたつて、大抵の男子がこのあたしに誘われてよろめかないなんてことはないはずだもの。少なくとも、これまでにはなかつたことだわ」

「うーん、まあ、おまえの言いたいことは分からぬでないよ。でもさ、疑問なのは、なんで今更ハンニバルなの？」

おまえつて、確かに聞いてるとちょっと自信過剰かなつて気はするけど、確かにその自信を裏づけるだけの顔はしてると思うし、実際もてるんだろ？」

大学生の恋人が複数いるつて話、つまり、卒業した上級生と今でも続いているつて話も聞くんだけど、それが本当のことなら、同級生なんかより大学生とつきあつてるつてほうがあまえにとつてずつとよくないか？」

それとも、ここはこんな僻地だし、やっぱり遠距離恋愛なんてそういう続かないものなの？」

するとマルガリータは、少し考え込むかのよつた姿勢をとつた後、俺の反応を窺うよつた上目遣いで俺を見た。長い睫毛と、青い瞳と、白い肌。今夜は親と同伴ゆえの薄化粧と、丹念に巻いた金色の髪もあいまつて、そのときのマルガリータはこっちが驚くほど可愛く見えた。まるで彼女がいつもの凶暴なマルガリータではないよつて思えて、少々混乱を覚えたほどだった。

「フォレストが、ハンニバル君の友だちだから白状しちゃうとね」

「うん」

「あたし、確かに何人かに告白されたことはあるけど、誰ともつきあつたことなんてなかつたのよ」

「え…、そななんだ？ そりやまたなんで？」

「なんでつて、だつて、自分が好きじやない相手とつきあつて何が楽しいの？」

それに、つちのママが娘たちにいつも言つてることとは、結婚する人以外とはしちゃいけないつてことなの。つまり、セックスのこと。本当に好きな相手に出会つたとき、絶対後悔するからだそうよ。言つてゐる意味はいまいち分からなかつたけど、ママが言つことで間違つていたことはこれまでなかつたし、あたし、今のところはそれを守ろうと思つてゐる。だけどつきあつたら、やつぱりそういうことつて断り難いと思うし……」

「そ、そりやそらかもな」

「あたしに告白して振られた人が、さもつきあつてゐみたいに言つてふらしちやつたことが、こんな噂が広まつた最初だつたかな。

みんなあたしが遊んでるつていうふうに思いたいみたいだつたし、実際そういうことで他の人より上に見られるのが気持ちよかつたから、何となくそういうことにしておいたのよ。

だけど本当は、みんなが思つてゐるよつたことはまだないのよ

「人は見かけによらないもんだな。俺はてつくり、おまえが相当のあれだと思つてたよ。

そんなんだつたら、おまえの姉さんみたいに、いつも清楚な格好していればよかつたのに」

「駄目よ。そんなことをしたら、他のグループの連中になめられて惨めな思いをするにとなるじやない。常にクラスで優位な立場でいるためには、強い女を演出しなきゃ」

「でもそうしていたらハンニバルに庇つて貰えたかもよ。あいつほんとにおとなしい女が好きだからね。おとなしいって、うか、地味な女」

「やうね。そんな気はしていたわ……」

第6話 狹い我が町

俺の母さんが、食後にと宣言して手作りのケーキと珈琲を持って部屋を訪れる頃、俺はマルガリータの純情を痛いほど感じ取っていた。昼間あつたこと、ハンニバルと年上のミカンさんとのことを、マルガリータに洗いざらい打ち明けてしまつべきかどうか悩んでいたのは、たとえ俺に飛び蹴りを食らわすような奴でもやつぱり身内であるマルガリータのことを大事だと思うからだ。

勿論、打ち明ければ、どうこうことになるかは分かつていた。思っていたよりずっと身持ちが固く堅実な考え方をするとしても、マルガリータの勝気な性格が生来のものである以上、彼女が黙つて引き下がるなんてことはあり得ない。最悪学校での振る舞い通り、手下の女子たちを引き連れて、ミカンさんに手を引けなんて脅しをかけないという保障はどこにもないわけだ。そんなことをしでかせば、確実にハンニバルに嫌われるだろうという計算ができないわけじゃないんだろうが、それでもそれをやりかねない奴だということは分かつていた。

だけど、確かにハンニバルとミカンさんがお似合いでないとは思わないけど、ミカンさんには何も恨みなんてないけど、マルガリータとミカンさん、どちらかの味方をしなければならないとしたら、俺が選ぶのは考えるまでもなく身内であるマルガリータだ。

「手作りだから、形はちょっと変なんだけど、たぶん味はいいと思うから食べてね」

うちの母さんが、マルガリータにケーキの皿を渡しながらやつぱりした。

「いえ、叔母さんが作るケーキは美味しいから、いつも楽しみにし

てこるの」

マルガリータは、お世辞ではなく本当に嬉しそうな顔をしてそれを受け取つた。

俺とマルガリータはお互にカーペットに直接座つて、だらしなく話をしていたから、俺たちはケーキを受け取るとそのまま床の上でそれを食べ始めた。正直、母さんの作るケーキは美味しい。店売りのケーキの倍はあるうかという大きな生クリームの塊が、うつかり床に落ちないかということを気にしながらも、俺たちはしばらく黙つて食べることだけに熱中した。

「ほんと、あんたのママって料理上手よね。

毎日こじんな美味しいケーキが食べられるなんて羨ましいわ」

皿の上のケーキをほとんどたのらげてから、マルガリータはやつと口を開いた。

「善し悪しだぞ。器用だけセンスはないから飾りつけは毎回変だし、たまに新メニューを考えたとか言って、何だうつと見たら、二二二二クが丸ごとケーキに乗つていていたりする」

俺は答えた。

「二二二二クがあ。二二ジンとかならありそうだけど」

「たぶん、自分はセンスがあつて独創的だつてことを家族に主張したいんだろうが、どんなに料理の腕が上達しても、料理本通り作るべき人間つてのはいるんだよな」

「でも、いいじゃない。被害は家族にしか出でていないとしたらさ。それにそれを毎回やるつてわけじゃないんでしょ」

「まあね」

「それより変なケーキと並べば、あのお店知ってる？ 五番街通りのケーキ屋さん」

「いや、知らないけど」

「そこって、ケーキの味はまざまざなんだけど、やつぱり形が変なよ。変って言つか、ダサい感じ。作ってる職人さんにセンスがないってことがよく出てるの。

都會じやまず卖れないだろくなあつて思うんだけど、この町にはケーキ屋さん自体が少ないから、何とか経営できてるって感じの店なのよ」

「ふーん。まあ俺は、ケーキは買ってまで食おうとは思わないからなあ」

「でも、その店が有難なことと言つたらう、ケーキよりせ、別の話でなの」

そこでマルガリータが不意に声をひそめたので、たぶんよからぬ悪口か何かなんだろうと俺は思つたが、案の定だつた。

「そのお店は、もともとマフィアの愛人がやつてるお店だったんだけど、今はその子供たちがやつているの」

「へえ、そいつはまた」

「実際、その店をやつてる長男つてのがまたチンピラみたいな奴でね。顔はいいんだからエプロンでもして愛想笑いのひとつもしていれば、奥様たちのアイドルになれそうなものなのに、終日レジのところで、胸の開いたシャツに金のネックレスなんて服装で凄んでるんだつて。それで余計に客が寄りつかないつてことを分かっていないのよね」

「うーん。ま、俺にしてみればどうでもいい情報だな。

とはいへ、客が寄りつかないのになんでおまえはそんなこと知つてるんだ？

分かつてこるのは思つたが、妙な世界に首を突つ込むもんじやないぞ

「分かってるわよ。あたしのチアリーティングのチームの一人にピーチつて子がいるんだけど、その子の家だからうつと知ってるだけ」

「そんな物騒な奴とつきあうなよ」

「擦れているのは認めるけど、そんなに悪い子じゃないのよ」

少しして、珈琲のおかわりを持つて来た母さんが、そのついでを装つてマルガリータに進路についての質問をした。勿論、俺がいるつてことを意識した上で、わざわざそんな話題を振つたことは分かつていた。

「進学を考えています、つて言つか、パパがそうしなさいって。学者の娘が大学に行かないと、世間体が悪いからと」

マルガリータは少々澄ましてそう答えた。
母さんは相槌をうつた。

「そうよね、マルガリータちゃんのパパもうちのパパも学者さんだから、やっぱりできればそうして欲しいのよ。でも、わたしたちは何も強制しようとしてそう言つてはいるわけじゃないのよ。ただ親としての希望を伝えてはいるだけのことだ」

「ええ、分かります」

「フォレストにも随分そう言つてはいるんだけど、それなのにこの子つたら、もう何ヶ月もこうやって意地を張つてはいるの。

進学するのが嫌なら、何か他に自分のやりたいことを決めて、そのことを頑張りなさいって言つても、考えていることを何も言わなくて困つてはいる。好きなギターを頑張りたいならそれでもいいのに言わないのよ」

母さんが、俺に対してもう一度言つてはいるのが分かりやすす

きて、怒る気にもならなかつた。俺は別に、ただ今はまだ将来のことなんて考えたくないだけなのに、そのことを理解しないことが頭に来るんだ。

でも、母さんのことを嫌いなわけじゃない。

親父のことだつて、別に嫌いってわけじゃない。相当苦手ではあるけど。

母さんが部屋を立ち去つた後で、マルガリータは不思議そうな顔をして俺を見た。

「あんたも変な奴よね。フォレストみたいな適当な奴ほど、執行猶予とばかりに大学に行きたがるもんだと思うのに。」

もしかして、勉強についていけないかもとか思つてる?

でも大学つて、今どきぬるい試験で誰でも入れるわよ。入つてからこのことは知らないけど、少なくともバカのあんたでも余裕で入れるわ。出るのは大変そうだけど」

「つるせーなあ。俺はただ、誰かの思い通りにはならないんだよ」

「ああ、なるほど、分かったわ。

あんたパパと仲悪いもんねえ、要するに、何となく逆らいたいだけなのね。

あんたには何か胸を張れる特技とか、あんたのパパを唸らせるだけの将来への展望なんてなくて、本当は何も考えてないだけなのにそれを認めるのも嫌で、だからと言つてパパの言いなりになるなんてもつてのほかで、それで突つ張つちやつてるつてわけね

「う…、つるせー馬鹿」

「馬鹿!？」

「ああ、そうだよ。マルガリータ、おまえはそつやつて余計なことを言つ可愛くない性格だから、ハンニバルの眼中に入れないんだよ。女なら、もつとしおらしくしてろ。

ルックス的にはハンニバルの女に負けてねえし、若さじや勝つてのに、相手にされないってのはおまえがどうしようもない生意気な

女だからだ。

いいか、男つてのは基本的には……

マルガリータの顔色が変わったことで、俺は自分がいま口走った内容に気づいた。

「ハンニバル君の女？」

マルガリータが俺に事の経緯を吐かせるために、何かプロレス技をかけようとしてゆらりと立ち上がりかけているのが俺には判った。

第7話 思いつきこそが行動規範

「あら、フォレスト。出かけるの？」

マルガリータに引きずられるようにして玄関を出ようとすると俺を、母さんが呼び止めた。

「あ、ああ。ちょっとコンビニ……」

「今夜は風が強いから、暗くなっているのに外出するのは危険だわ。明日では駄目なの？」

「急ぎの用なんだ」

「じゃあママが車を出すわね」

そう言つて、まるで幼稚園児のつき添いをするような調子で母さんまで一緒になつて出かけようとするのを、強引に玄関の扉を閉めることで遮つた。ドアの向こうで母さんが喚いていたが、言つている内容が酷すぎて聞いていられなかつた。

「フォレスト！？　だめよ、子供だけで出かけるなんて。

帰り道が分からなくなつたらいどうするの？　迷子になっちゃうのよ！？」

「……勘弁してくれ」

俺の母さんは優しいんだけど、俺がもつガキじゃないことを親父とは別の意味で理解していない人で、要するに過保護な人だ。兄貴みたいな内気な男にとつては、ああいうのが居心地がいいのかもしれないが、俺にとつては甘つたるすぎてときどき叫び出したい気持ちになる。近頃じゃもつ、息苦しくて耐えられないんだ。

「うちのママも大概だけど、あなたのママもかなり重症ね」

先を行くマルガリータが笑っている。

そのまま、俺とマルガリータは連れ立つて砂混じりの風の吹く夜道を歩き出した。こんなときにバイクがあつたら便利なのに、未だにバイクを買つてくれない親父のことを内心で恨みながら、目指すは七番街のハンニバルの家だ。

その後マルガリータに電気ショックと称して股間をぎゅうぎゅう踏まれることによって、俺はすべてを白状していた。知つてゐる限りのことを。つまり今日出くわしたハンニバルとミカンちゃんに関する一部始終を全部だ。

だけど、意外に気分は悪くなかった。それから結構わくわくしていた。

要是面白ければ何でもいいんだよ、俺つて人間は。

ハンニバルの家っていうのはこの町の有力な地権者で、代々学者の家柄で、俺が知つてゐるだけでも彼のお祖父さんは著名な科学者、彼の母親は大学教授、という具合だった。広義には同業者とは言つても、うちの親父のような貧乏研究員なんかとは桁の違つ金を容易に稼ぐことができる身分なんだろう。

そもそも土地を持つてゐるんだからあくせく働かなくていいところを、趣味のような研究職が高じてしまつたとかいう話を謙遜話としてハンニバルに聞かされたときにはかなりやりきれないものを感じたものだが、とにかくハンニバルの家は、この砂漠の町には数件しかない豪邸のうちの一つだった。

外壁の向こう側に広がるハンニバルの家の庭の緑地と噴水を見て、

マルガリータは目を輝かせているが、何しろこの乾燥地帯では芝生を保つにも相当の財力が必要だからだ。幾つかの噴水が無駄に噴き上げているあの水だって、この砂漠の町ではタダなんかじゃない。ガソリンよりもずっと高価なものなのだ。

「すうーー！ ハンニバル君つて、本当にお金持ちなのね」

まるで貴族の城にあるような高くて立派な石壁の命間に、僅かにあら鉄格子の隙間を覗きながら、マルガリータは分かりやすい歓声をあげた。

「そうだね」

「こんな家に住めたら素敵だろ？ なあ

「だろ？ うね」

「何よ。感動のない奴」

「だつて俺は何度も来てるからね」

「あ、そうか」

「で、どうすんの？」

俺が言つと、マルガリータは拳を握り締めて宣言した。

「……勿論、告白するわよ！」

「断られたら？」

「押し倒してもものにするつー、年上の女なんかに負けるもんですかつ！」

あたしがもう後には引けないってこと、あんただつて分かってるんでしょ？

相手がチアリーディングのチームのメンバーの姉さんだつて言つながら、あたし、どんなことがあつたつて負けられない。絶対に出し抜いてやらなくちゃ。

だつてもしペー・チが自分の姉さんとハンニバル君がつきあつてゐる
なんてことを誰かに漏らしたら、あたしが学校で築き上げて来たキ
ヤリアはどうなるの？ このあたしが男の子に振られるなんて、そ
んなことがあつていいことだと思う！？

そんなことにもしなつたら、どんなときだつてクラスの人気者で、
皆の羨望の的であるあたしの人生はおしまいよつ！
だからこうなつたら、色仕掛けでも何でもして、絶対彼のこと落と
してやるつ。

ハンニバル君が初めての相手なら、あたし、悔いはないもんつ！
「いいだらうマルガリータ。突撃するからには死力を尽くせ。
たぶん駄目だと思つけど……まあ、骨は俺が拾つてやる」

そして俺は正面門のところにあるインター・ホンを押した。間もなく
して聞こえてきたのは優しそうな女の人の声だつた。聞き慣れた声。
ハンニバルの母親の声だ。

「フォレスト君と一緒にばかり思つていたんだけど……まだ帰つ
て来ていないので」

インター・ホンは言つた。

俺はマルガリータと顔を見合せた。

「ハンニバル君、いなつて？」
「うん」

ハンニーバルの母親は、礼儀知らずにも夜の九時過ぎに訪問した俺とマルガリータを、嫌な顔ひとつせず豪邸の二階のハンニーバルの部屋に通してくれた。

団体のでかいハンニーバルの母親らしく、彼女は女性としては大柄だったが、決して太っているというわけではなく、どちらかと言えば骨太といった感じだった。それに清楚で優しげな雰囲気をしていて、その点はあのミカンさんと非常に重なり、俺はマルガリータの分の悪さを実感せずにいられなかつた。

「ハンニーバルは無断で外泊をしたことはないし……、たぶん、じきに帰つて来ると思つわ。ゆつくりしていってね」

ハンニーバルの母親は、見るからに高級そうなケーキやら冷たい飲み物やらを俺たちに用意しながら、そう言って微笑んだ。

それに改めてよく見ると、ハンニーバルの母親というのは雰囲気だけじゃなく、控えめな微笑み方とか、髪の色合いなどがミカンさんと似通つていて、俺は何とも言いづらいハンニーバルの秘められた願望と言うか、性癖と言うか、まあありていに言つちゃうとマザコンチックな女の趣味を思い知らされた思いがした。

「ああ、本日二個目」

嬉々としてケーキを頬張るマルガリータをよそに、俺は冷たいジュースを飲むのが精一杯だつた。俺は自分が小食な男だと思っているわけじやないが、ケーキみたいな甘つたるいものを腹いっぱい食べるなんてことは、ほとんど苦行に近いことのよくな気がする。

俺の分のケーキを無言でマルガリータの席のほうへ動かし譲つてや

る頃、部屋の扉が開き、子供の個人部屋としては信じられないほど広くて贅沢な部屋の中に、黒匂くめのいかにも柄の悪そうな女が入つて来た。

ハンニバルが帰つて来たのかと思い、弾かれたように顔をあげた俺としては、正直視線をどこにやつたらいいのか分からぬ気分にさせられるほど、その女の胸の辺りはぱっくり開いていて俺は早朝の駅の拳動不審者のように視線を彷徨わせた。

暑い夜のこととはいえ、かろうじて胸の先端が隠れているというだけの服装で外を歩ける女の神経は度し難い。男たちがどんな目で自分を見ているかということを知つていてるならなおさらだし、知らないのであればご愁傷様という意味だ。

「あれ、フォレスト君じゃない。あれえ、隣にいるのは彼女かなー?
? 可愛いわねえ」

少々酔っ払つてゐるその柄の悪そうな女は、ハンニバルの姉さんのアマリアだつた。

化粧が濃いだけじゃなく、不良娘たち特有のあのどぎついメイクはなんて言うんだ? とにかくあの清楚な母親から生まれたとは到底信じられない擦れつぱりである。

彼女が随分前からこのようにぐれてゐることは知つてゐるが、それ以前はいかにも金持ちの家のお嬢さん風だったのを知つてゐる者としては、この変化はやはり見ていてつらい。

金持ちの家に生まれ、豪邸で暮らして、親には社会的な地位があり、しかも献身的で優しそうだ。何ひとつ不自由なことなどない人生だろうに、何が面白くなくてこんなふうになつてしまつたのだろう。そのことについて彼女にインタビューしてみたいと、俺は彼女を叩撃するたびに常々思つてゐるのだが、実際そんなことを聞いたら余裕で殴つて来そうな気がするので今回も自肅しておいた。

可愛いと言われたことで気をよくしてゐるマルガリータの單純さを

横目に、俺はソファに腰かけたままアマリアを再び見上げた。

「いや、彼女じゃないけど……あの、ハンニバルが何処に言ったか知りませんか？」

「あー、帰つてないんだ。部屋に灯りがついていたから、帰つて来たのかと思って覗いてみたんだけど。じゃああいつ、泊まる気なのかな」

「泊まる？ 何処へ？」

「ん？ 言つちゃつていいのかな？」

それが傑作でね、あいつあたしの遊び仲間の妹とできてさあ、まあその妹はハイスクールの同級生だったんだけど、まずそもそもが

もつたいぶつて前置きが長い上に、酔っぱらいの要領を得ない証言を要約すると、こういうことだった。

五番街ケーキ屋でケーキ職人をやつているミカンという娘とハンニバルはできている。

アマリアはミカンさんのマフィア兄貴と友人で、本日、ハンニバルがミカンさんと店で会つてているのを見かけた。よそそつな雰囲気で羨ましかった。

「つかミカンって人のお兄さん、ガチで悪い人なんですか？ 五番街のケーキ屋つて、レジにチンピラがいるつていう店のことですね」

「そそつ。悪い人つて言つたが、某組織の構成員かな。まあそんなどこ」

「ほんとですか……。んで、ハンニバルはそのマフィアのお兄さんを持つミカンさんつて人と出来てるつてことなのか」

俺が言つと、アマリアは平然と頷いた。

「ええ、そうみたいね」

「なんでそういうことになつたんだる。あんまり接点なさそうなの

に」

「ミカンはむかあし、あたしの友だちだつたのよ。あたしが自分に目覚める前のことだけ」

自分に目覚める前、と言つのは、恐らく清楚なお嬢様だつた頃といふことのようだつた。

「うちつてお金はあるけど、家庭は崩壊しているも同然だからね。まず両親は正式に結婚していないし、親父はチンピラ。もつとも、世界一いかしてゐつてあたしは思つたが、うちの家風じやないことは確かなのよ。

まあドラマとかでよくある話なんだけど、生糸のお嬢様だつたうちのママが、チンピラ男にのぼせちゃつたのが運の尽きね。お祖父ちゃんとお祖母ちゃんがそんな男と結婚なんて駄目だつて大反対して、結婚させなかつたまではいいんだけど、結婚しなかつただけでこつそりやることはやつちやつて、一人の間にはあたしを含めて子供が三人もいるし。

お祖父ちゃんが元気だつた頃は、いつも獵銃を持ち出して親父と対決してたわ。親父がこの家に住み着くようになつてからは、家の中が嵐みたいだつた。

あんたも知つてゐるでしようけど、うちのママもお祖母ちゃんも育ちがいいから、外面をよくすることにいつもものすごく神経を使う人たちだらね。あたしもある時期この土地の名士の娘らしく、いつもきちんと上辺を取り繕わないといけないだけに集中していたわけ。

ハンニバルはそれで、寂しい思いをしていたのかもね。あんたはガキだつたからまんまと外面が立派なことに騙されていたけど、ミカンはうちが本当は荒れてるつてことに気づいたみたいでさ。だから

ハンニバルは最初、ミカンに甘えていただけだつたと思うけど……、それがそのうちそういう方向に行つちゃつたんじゃないかな。ほらミカンも兄貴がチンピラで、共通する苦労もあつただろうから余計にね

「そんな事情があつたのか

俺が言つと、アマリアは唇を微笑みの形にして頷いた。

「そつ。だから、今夜はお泊りかなあつてね」

「それ、確かなんですか?」

しばらく蚊帳の外に置かれていたマルガリータが、燁然として言つた。

その問いかけに、アマリアはもつと不満そうな顔をした。メイクのせいか、それともマフィアのお友だちなんてのがいる反社会的なバツクグラウンドが見えたためか、非常に怖いお姉さんの睨みは、正直俺ですら縮み上がるものだつた。

「ええ、確かに。何、あんたあたしの言つことを疑つわけ? でもこんな嘘をあんたらにつけてもしようがないし」

するとそこでマルガリータがいきなり席を立ち、そのまま勢いよく部屋を飛び出して行つたのだった。やはりここで引き下がつたり泣いたりするような気の弱さなんていうものを、マルガリータは持ち合わせてはいられないわけだ。

これまでにも対立する気の強いクラスメイトの女どもを、ぶつ潰すことでも現在の権力を手に入れた女の気迫と言うものは半端なものではない。もつともアマリアが更に怖かつたから、逃走したということもあるかもしがれなかつたが。

「彼女、どしたの

アマリアが、マルガリータが飛び出して言つたドアを指差して言つた。

「ああ、んと、あいつは実はハンニバルに会いに来たんだ。つまり俺の彼女じゃなくて、マルガリータはハンニバルに惚れてる」

「ああ、なるほど。そりゃお泊りなんて聞いたら……、ぶち切れだわね」

特に悪びれるでもなく、ため息混じりにアマリアは言つた。

第9話 五番街

定期的に街灯が行く手を照らしてくれているとはいっても、風の強い夜に五番街くんなりまで出かけて行くのはそう容易なことではなかつた。

けれどもマルガリータが本気でどんどん先を歩いて行つてしまつので、治安のいいとは言い難いこのイーストオアシスの夜道を、まさかあいつ一人で歩かせるわけにもいかない。

こんなことなら最初から素直に母さんの車に乗せて貰えばよかつたと、砂利の入つたスニーカーにイラつきながら俺は密かに後悔していた。

五番街はこの町の所謂メインストリートに面しているのだが、五番街と言えばちょっとした悪の巣窟、つまり一般的な住宅地区じやなかつたのだ。

イーストオアシスは都会から隔離されたような片田舎、と言うよりは、学者たちが砂漠の何だかを研究するために集まつて作られた町だつた。そこへ、利益を当て込んだ連中が飲食店だの何だのを作り始めて、学校ができ、企業も来た。けれども町として成立して日が浅いこの場所には、警察機関の進出が遅れていたせいなのか、マフィアみたいなも、独自のネットワークで暗黒街を形成し始めてしまつているのだ。

ミカンとか言う女の兄貴が、地元マフィアの構成員だなんて話を思い出して、俺はちょっと氣が引けていた。下手に出ていれば高校生相手に本気になることはないだろうと祈りたいが、分かつていることは、とにかくマルガリータを適当なところで諫めて、無傷で帰宅させないことには俺が後でティム伯父さんに殺されてしまうといつことだ。

アメリカと一緒に来て欲しいと頼んだが、彼女は俺の嘆願を一蹴した。

「あんな馬鹿娘のために、なんであたしが骨折らなくちゃなんないのよ。人ん家に来て挨拶もなしに帰つて行くなんて、盗人も同じじゃないの。いつたいどういう教育をされているんだか」

基本はお嬢様のアマリアが眉を顰めていた。

「どうせハンニバルがミカンといふところを見て、泣いて帰ることになるんだろうから、三十分で事足りる用事でしょ？ あたしは酒を飲むのよ」

砂漠の町特有の大掛かりな日除けに、立ち並ぶ商店の軒。商店街用の商標つき街灯。オアシス高のチアリーディングチームを宣伝する看板もあつた。

五番街の多少は商店街らしい佇まいが、幾らか俺を安堵させた。まだ十時前なのでシャッターを開けている店もあつたし、買い物客の姿も見られたからだ。

ちらほらとではあつたが人影があるので、いざというとき悲鳴をあげたら、誰か大人が警察に通報してくれるんじやないかといつのは、甘い期待だろうか。俺は一応ポケットの携帯に、警察の緊急番号を用意してそれに備えた。

五番街の小さくて目立たない、何となく壁の薄汚れた建物が、件のケーキ屋のようだった。

店の窓からは明かりが漏れ、そつと覗き込んでみるとまだ営業中のようだ。店内のレジに、なるほど例のマフィア兄貴がふんぞり返っているのが見える。確かに胸をはだけさせ、金のネックレスをして

いる柄の悪そうな男だつた。

チンピラが取りがちな威嚇なのだろうが、カウンターに足を乗せ、店の中でケーキを物色する客を、細かく見ている。だが睨んではないようだ。店の客は常連なのか、ときどき彼と会話を交わしていた。それに思つたほど迫力のある男ではなかつた。中肉中背だし、何と言うか著しく童顔だつたのだ。年齢はミカンさんの兄貴と言つたら恐らく二十代半ばくらいだろうが、下手をするとやつぱり高校生で通用しそうな子供っぽい雰囲気もあつた。

そういう印象を、マルガリータとしても持つたのかもしれない。マルガリータは臆することなく店内に入り、そのマフィア兄貴のいるレジ前に行くと、いきなり言つた。

「ミカンって女に会いたいのよ

「ああ?」

けれども、顔は童顔だが、彼の態度はやつぱり怖かつた。

マフィア兄貴が顔を歪めて凄んだので、俺はマルガリータに続いて店に踏み入れかけた足を止め、店に入るのをよそがくと思つたほどだつた。

でもマルガリータは偉そうに両手を腰に当てて、まるで手下のクラスマイトたちを相手にするときのようにに氣にせず続けた。

「ハンニバル君がここにいることは知つてゐるよ。彼は何処なの? ミカンって女と一緒にいるんでしょ?」

「あ?」

「彼に会わせて!」

愚かにも、マルガリータは悪い人を相手に声を大きくした。

「……、何だか知らんがなお嬢ちゃん。人様に物を頼むときは、そ

れなりの言い方つてものがあるんだぜ。最近のメスガキは、常識つてものを知らないのか？ え？」

するとマフィア兄貴は、カウンターの上に乗せていた足をわざとカウンターにぶつけて、物騒な物音を立てた。店内の客がまたかという顔をしながらレジから離れて行く。彼は機嫌が悪いと、見知らぬ女でも食っちゃうからねえなんて、囁かれているのが聞こえて俺は青ざめた。

見知らぬ男に恐い態度を取られて、さすがのマルガリータも自分の言い方がやばいということによつやく気がついたようだつた。

俺は慌てて怯えて立ち竦むマルガリータの横に行つて、マフィア兄貴にマルガリータの不躾のフォローをした。これだからマルガリータつてのは後先を考えない馬鹿だと言うのだ。馬鹿には係わり合いを持つべきではないというのは、これは先人たちの知恵だ。いま適当に思つただけだけだ。

けれどもどうせ厄介事になつたら、女を置いて逃げるつて選択はないだろ？ し、どうしたつて俺がこの馬鹿を庇つてやらなければならないので、先手を打つて穩便にしたほうが百万倍ましだつた。

俺は断じてハンニバルのコバンザメではないが、強情な親父と出来のいい兄貴なんていふ、立て貰つて当然という顔をした連中と共同生活を送つてゐる次男として、悲しいかな身についてしまつてゐる処世術はあつた。

「実は俺たち、さつきまでアマリアさんと会つてて

マフィア兄貴を執り成すために、彼と友人だというアマリアの名前を出すと、兄貴はじろつと俺のことを見た。

「アマリアに。それで？」

「俺はその、つまりハンニバルがここにいるつて彼女から聞いたん

です。俺たちハンーバルと学校の同級生で。今夜約束があったのに、あいつにすっぽかされちゃって、それでちょっと話ができたらなんて。いやつ、いなーって言うなら、俺たちあつさり引き下がりますし、こちら様の「商売の邪魔なんてしないんで……」

するとマフィア兄貴はふんぞり返った姿勢のまま、俺の顔をしばらく眺めていたかと思うと、思っていたよりずっと筋肉質な太い腕をぬつと突き出した。彼が童顔のひ弱な男ではないことや、ケーキ屋のレジが本業でないことを確信させる、非常に強暴そうな腕である。おまけに「一寧にも、タトウまで彫つてあった。血管に歯向かうように入つているナイフの傷跡はなんだろう？」彼は人殺しすらしたことのある男なのかもしれない、俺はそれでつきり横っ面を殴られるぐらいのことはあるかなと覚悟をしたが、彼は親指を突き出すとニヤリと笑つて店の奥の扉を示した。

「会つて行け。厨房にいるはずだ」

「ど、どうも。お兄さん。」親切に。そのネックレス、バツチリいかしてますよ」

第10話 クラスマメイトへの告白

扉を抜けた俺たちは、一息吐くまでもなく次の現場に出くわした。このケー・キ屋は建物自体が小さいから、ドアを一枚隔てたらすぐにそこがケー・キを作る厨房だったのだが、そこでハンニバルとミカンさんが楽しそうに話をしている場面を目の当たりにしたというわけだ。

エプロンをして、粉まみれになつて、業務用キッチンカウンターの上の生地のようなものをこねているミカンさんと、嬉しそうにやけて彼女の傍にいるハンニバル。それがパイか何かの生地だということは、料理好きの母親のおかげで俺にはすぐに分かつたが、注目すべきはそこじやない。いつも表情に影があつたあの陰鬱さは何處になりを潜めたんだといつ浮かれた顔で、心から笑つてゐる奴の姿がそこにあつた。

もし、このときの俺が洞察の何たるかを知つていたなら、この表情だけで彼の探し求めていた幸福がこのキャラクター・Tシャツの女にあるつてことを、理解することもできたのだろう。

でも俺はまだ十七歳だった。

「あれつ、フォレスト。何？」

俺が咳払いをすると、マルガリータの存在なんか目にも入らなかつたのか、ハンニバルは俺にだけ言つた。

「えつと、まあ、その

俺はマルガリータを指差し、苦笑いを作つた。

「その女と別れて！」

マルガリータはまた、後先考えず自分欲求だけをじり押しすべく、悲痛な声でいきなりハンニバルに迫った。

「あたし、ずっとハンニバル君のことが好きだつたの。ずっと言えなかつたけど、高校に入つてからずっと……、だからあたしとつきあつて欲しいの。だからその女とは別れて！」

「俺？」

一方のハンニバルは自分を指差して、そして喜んでいるふうもなく言った。曲がりなりにもクラスで人気者の女子が自分に告白しているのに、彼にはその価値が分からないうらしい。マルガリータは一生懸命になつて頷いたが、ハンニバルはまったく状況が理解できないという顔をしていた。

マルガリータとハンニバルは互いにそのまま黙つてしまい、しばらく気まずい沈黙が続いた。

やがて気を遣つてくれたのだろう。場を執り成すように、キッチンにいるミカンさんがこちらに向かつて笑つて言つた。

「遠慮しなくていいのよ。わたしたち、別につきあつていないうから」「えつ、そうだったんですねか？」

珍妙な空氣に冷や汗を搔いていた俺がその執り成しを拾つと、ミカンさんは頷いた。

「ええ。いつたいどうしてそんなお話になつていいの？　でも、そういう関係じやないのよ。ハンニバル君はときどきついに買い物に来てくれる常連さんなだけ。

今もね、パイの作り方を習いたいって言つから、見て貰つていたのよ

「ああ、やつなんですか」

それによつて、俺は意外にもマルガリータの恋路が、叶つてしまつ
んじやないかといつ気が一瞬したのだ。
しかしそうぐにハンニバルが納得いかないといつ顔でミカンさんを見
た。

「なんで？」

ハンニバルにとつては、マルガリータの渾身の告白なんか屁でもな
いといふことなのだ。彼は田の前で告白したマルガリータが返
事を待つて震えているのに、それには田もぐれずミカンさんを覗
き込んだ。

「なんでそんなことを言つんだ？ それはないだろ？
「えつ、だつて、つきあつてない……でしょ？」

当惑したように粉のついた両手をかざし、ミカンさんは言つた。

「そんなことない。つきあつてる
「でも……、貴方はまだ高校生だし……、わたし、とてもそんなふ
うことは……」

ミカンさんは粉だらけの手で自分の髪に手をやり、マルガリータの
ほづに、申し訳なさそうな視線をやつた。そのミカンさんの両肩を
掴んで自分のほうを向かせると、ハンニバルはたたみかけた。

「じゃあつきあつてくれ。俺と…」

「でつ、でも……、ほら、彼女、貴方に告白しているんだから、ち
やんと聞いてあげなくちゃ……」

「ああ、あれは俺たちには関係ないよ。あんなの只のクラスメイト。只の冷やかしだ。夜も遅いし、もう帰るよ。

それにさ、あいつは何人も彼氏がいるんだよ。大学生だの、物理の教師だの。だから俺とはまったく関係ない。ほとんど口をきいたこともないくらいさ。

今だつて夏休みだからって、フォレストと一緒にになって、俺をからかってるだけなんだろう。あいつら従姉弟同士だから

「でも、すごく真剣に……」

そう言うミカンさんにそのまま強引にキスして、更にハンニバルはマルガリータではなく、ミカンさんだけをみつめて言った。

「おまえが好きだ。これで俺たちはつきあつた。もう嫌とは言わせない」

第1-1話 そんな夜

「藪蛇……」

帰り道、失恋で泣きじゃくるマルガリータのやや後ろを歩きながら、俺は頭を掻いた。

まあ確かに、根が真面目なハンニバル君は複数の男と交際しているなんて噂が立っている女と、わざわざつきあつてみようなんて考えるような種類の男ではないのだ。強い女という評判のために見栄を張つたことが、致命傷となつてしまつた。

しかも恐らくハンニバルとミカンさんには、俺が勘ぐつていたような深い関係なんてなかつたのだろう。そもそも酔っぱらつていたアマリアの証言だつて、思い出してみればあればちやらんぽらんな部外者が、憶測で物を言つていただけだつたという氣もある。

少なくともミカンさんがマルガリータの告白を聞くようにハンニバルを促していった辺り、ハンニバルが一方的に年上のミカンさんに、懷いているだけの関係だつたに違ひない。

それなのに、二人の間にある年齢差とかいろいろなことで、たぶんまだ何でもなかつたはずの一人の仲を、マルガリータの突撃によつて図らずも進展させてしまつた。

マルガリータは通りを歩きながら、すれ違う人目も憚らずに大声で泣き喚いていた。

俺は彼女が本当はまったく遊び人でもなければ不真面目でもない、純情な内面を持つている女と知つていたから、何とも可哀想な、申し訳がないような気持ちだつた。しかもこの真実を後でハンニバルに話して聞かせたところで、ミカンさんにのぼせている奴にとつては、あまり意味がないことなのだ。

「まあ、元気出せよ……」

そんなことは無理だといつ」とを承知で、俺は言った。
とぼとぼ先を歩くマルガリータは、しばらく何も言わずに黙り込んでいたが、やがてぽつりと呟いた。

「悔しいわ。こんな」と

「そうだな」

「あたしのほうが可愛いのに」

「うん」

「もてるし、人気者だし。あたしつてクラスのヒロインよ」

「うん」

「ああいう女は卑怯よ。本当はそれほどか弱くなんかないくせに、おとなしい振りをして、いつだって男の注意を惹くのが上手いのよ」

「それはあるかもね。まあ、でも元気出せよ」

「元気なんか出ない。あたし、もう死んじゃいたい！」

マルガリータは声を大きくした。

「また大袈裟な。まだ何も決まったわけじゃないだろ。決まったわけじゃないって言つたが、つまり何も一人が結婚するつてわけじゃない。ただつきあつただけなんだし。三ヶ月後には、どうなつてるかさえわからんないようなことじゃないか。

それに、ハンニバルは大学行くだろ。姉さんがあんなんだから、あいつが家を継がなきゃしようがないような感じだし……、本人も進学するつもりみたいだつた。そうしたら、ミカンさんとは何年も離れ離れだ

「そうよね」

すると単純な彼女らしく、いきなり明るい返事が返ってきた。

「彼はこの町を出て行くのよね。そうだわ、何も一人は結婚するつてわけじゃないのよね」

俺はこの女のその単純さ加減と言いつか、開き直りの早さにちょっとついていけないものを感じつつ、しかしここでまた腐られても慰めるのが大変なので、マルガリータの言い分に乗つかった。

「ああ、その通りだ」

それでマルガリータは俄然元気を取り戻して、俺を振り返つて強気に笑つた。そのときたまたま、スポットライトのように夜の街灯に照らし出されたマルガリータの様子は、金色の髪が風に乗つて、短いスカートがひらひら揺れる様子も、何故だか可憐に思えた。

「フォレスト見ててよ、あたし、絶対諦めたりしないわ。年上の女なんかに、あたしは負けない。

障害があればあるほど、あたし、ファイトが湧くもの」

「うん」

「だからきっと彼を振り向かせてみせるわ。今はそうでなくとも、だつてあたし、絶対彼と同じ大学へだつて行ってみせるし。専攻も同じにするわ。同じ授業が取りやすいように」

「その意気だ」

「ハンニバル君はあたしのものなの！ これは運命なんだからー！」

「うん」

マルガリータのそうした決意表明を聞かされているにつけ、どうにも俺の胸中に不快な感じがあるように思われたが、それはたぶん気のせいだつただろう。

「頑張ればいいさ。後悔がないよ！」

「ええ、見ていてよ。誰がハンニバル君の隣で最後に笑うかを。こんな片想いのままなんかじゃ、絶対この恋を終わらせたりしないんだもんっ！」

この俺が近所の美少女のカレンちゃんを差し置いて、馬鹿で凶暴なマルガリータを可愛いと思うなんて、只の気のせいなんだ。目が覚めた瞬間にそれまで見ていた夢が跡形もなく消えて行くように、この夜の出来事だって、一晩眠ればきっとすぐに忘れてしきに違いない。

確証はないけど。

でないとあまりにつら……よつな気がする。
気がしないでもない。

そんな夜。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3389f/>

イーストオアシス

2010年10月28日04時04分発行